

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

(楽団長) ミハエル・ザンデルリンク (首席指揮)

小川 典子 (ピアノ)



2017年6月29日(木)18:15開演(17:45開場)

昭和女子大学人見記念講堂

■主催:学校法人昭和女子大学

PROGRAM

ウェーバー: 歌劇「オイリアンテ」序曲

ベートーヴェン: ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73 「皇帝」
(ピアノ: 小川典子)

ブラームス: 交響曲第1番 ハ短調 Op.68

PROGRAM NOTE

寺西 基之 (音楽評論家)

ウェーバー：歌劇「オイリアンテ」序曲

カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786-1826) は音楽史上ではドイツ・ロマン派オペラの確立者として有名である。特にドイツ・オペラ史上における新しい時代を拓いた作品といわれるのが 1821 年に初演された代表作「魔弾の射手」だが、「オイリアンテ」はそれに続いて書かれたオペラで、1823 年に初演された。いかにもロマン派好みといった中世を舞台にした幻想的な物語によるオペラで、アリアや重唱やレチタティーヴォなどの間の区切りを明確にせず音楽の流れを連続させるとともに、ライトモチーフ的な手法を効果的に取り入れるなど、「魔弾の射手」よりもさらに書法を進化させ、のちのワーグナーの楽劇を先取りするような作品となっている。ただヘルミーナ・フォン・シェジーによる台本の拙さなどが原因であまり成功を収めることができず、今日でも上演機会は残念ながら少ない。しかしオペラ中の旋律を主題に用いた序曲は輝かしい魅力を持った名品で、演奏会のレパートリー作品として定着している。力強く生き生きと運ばれる自由なソナタ形式の序曲だが、展開部の途中にはオペラの中の幽霊の音楽によるラルゴの一節(弱音器付きの8本のヴァイオリンによる)が挟まれて幻想的な雰囲気を生み出す。

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 Op.73 「皇帝」

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770-1827) の残した5曲のピアノ協奏曲の中でも最も規模の大きいこの作品は、「皇帝(エンペラー)」という通称(ベートーヴェン自身による題ではない)で知られるとおり、華麗な独奏と力強いオーケストラとが繰り出す雄弁な響きと雄渾な楽想が威容に満ちた広がりを作り出す。作曲は1809年、中期の一連の大作群をとおして獲得したダイナミックでスケールの大きな書法が、協奏曲様式と見事に結び付いた傑作である。一方で、従来の協奏曲の慣習であった演奏家による任意のカデンツァを廃止して、カデンツァを楽譜に記した形で組み込むなど、新しい試みを行っている点もベートーヴェンらしい。とりわけ第1楽章冒頭に華やかな独奏カデンツァを置いているのは注目される。

第1楽章(アレグロ)は協奏風ソナタ形式をとるが、今述べたとおり冒頭にピアノが華麗な独奏を披露する。ピアノとオーケストラとが互いに拮抗しながら展開する壮麗な楽章である。第2楽章(アダージョ・ウン・ポーコ・モッソ)は瞑想的な主題が自由に変奏されていく緩徐楽章。そのまま続く第3楽章(ロンド、アレグロ)は華やかに力強く発展するロンド・フィナーレである。

ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 Op.68

ロマン主義全盛の19世紀において伝統的なジャンルと古典的様式を重視したヨハネス・ブラームス（1833-97）だが、崇敬する先人ベートーヴェンの偉大な交響曲に対する強い意識と、生来の自己批判的な性格とが相俟って、当初は交響曲という伝統ジャンルを手掛けることには慎重であった。交響曲を書く構想は初期の1855年前後から持っていたのだが、その後長年にわたって多くの試行錯誤を繰り返し、自分なりに納得のいく交響曲のスタイルを苦勞しながら模索していく。完成をめざしての創作にやっと自信を持って本腰を入れるようになったのは1874年頃のこと、1876年に交響曲第1番はついに実を結ぶこととなった。初演は同年に行われたが、その後ブラームスはさらに第2楽章に大幅な改作の手を入れ、現行の形に仕上げている。まさに労苦の結晶だけあって緻密に構築された交響曲で、その中にロマン的情感を豊かに湛えている点がブラームスらしい。

第1楽章（ウン・ポーコ・ソステヌート〜アレグロ）は緊迫した序奏に続き、闘争的な主部が劇的に展開する。第2楽章（アンダンテ・ソステヌート）は叙情に満ちた緩徐楽章。終りの部分では独奏ヴァイオリンとホルンが美しいデュエットを奏でる。第3楽章（ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ）は間奏風の楽章。第4楽章（アダージョ〜ピウ・アンダンテ〜アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・プリオ）は不安な緊迫感の漂う序奏で始まり、霧を晴らすかのようなホルンの響きと荘重なコラールを経て、明朗な主部に入る。晴れやかで力強いフィナーレである。



プロフィール

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は、創立以来それぞれの時代の名だたる指揮者たちと活動してきた。1930年代に世界的な名声を得たのは、ケンペンのリーダーシップが大きい。この時期の成長により、ニキシュ、アーベントロート、ブッシュ、カイルベルトなどの世界的な指揮者たちの客演が実現した。

1994年にブラッソンが首席指揮者を務め、2001年には世界的名声を得ているヤノフスキがその後継者となる。ドイツの伝統を継承し、あらゆる世界一流の演奏会場で世界的なオーケストラと共演してきた経験豊富なヤノフスキの参加は大変歓迎すべき転機となった。2003年にはフリーベック・デ・ブルゴスが首席客演指揮者に迎えられ、1年後に首席指揮者に就任。世界のトップ・オーケストラを指揮してきた経験とカリスマ性をもつ彼と、同団とのパートナーシップは世界各国で高い評価につながった。

2011/12 シーズンより、ミハエル・ザンデルリンクが首席指揮者に就任。

ミハエル・ザンデルリンク（指揮者）

2011年からドレスデン・フィルの首席指揮者を務める、今ドイツで最も注目を集める気鋭の指揮者で、20世紀最大の巨匠のひとり、クルト・ザンデルリンクを父にもつ。幼い頃からチェロを学び、わずか19歳でクルト・マズアによりゲヴァントハウス管弦楽団のチェロのソリストに選ばれ、その後欧米各地の著名なオーケストラとチェロのソリストとして共演し、世界的な成功を収めている。2001年より指揮者としての活動を始めるとすぐに頭角を現し、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、バイエルン放送交響楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン放送交響楽団などの著名なオーケストラに招かれている。

若手音楽家の指導、育成にも意欲的で、ドイツの最も有名なユース・オーケストラのひとつであるドイツ弦楽フィルハーモニーの音楽監督を務めるほか、フランクフルト・アム・マイン音楽舞台芸術大学で教鞭を執っている。

小川典子（ピアノ）

英国と日本を拠点に世界の主要オーケストラ・指揮者との共演や、室内楽、リサイタル等で世界各国へ演奏旅行を行う他、国際的なコンクールでの審査、各国でのマスタークラスなど、国際的で多彩な活動を展開中。録音は北欧最大のレーベルBISと専属契約を結び、34枚のCDをリリース。2017年は、イギリスでロイヤル・フィル、モスクワ・フィルとの共演やカナダ・バンフ芸術センターでのマスタークラスとリサイタルの他、イギリス、フランスの多くの音楽祭にも招聘されている。英ギルドホール音楽院教授、東京音楽大学特任教授、ミューザ川崎シンフォニーホールアドバイザー、「ジェイミーのコンサート」主宰、NAS 英国自閉症協会文化大使、イプスウィッチ管弦楽協会名誉パトロン。文化庁芸術選奨文部大臣新人賞受賞、川崎市文化賞受賞。2016年2月より第10回浜松国際ピアノコンクール(2018年)審査委員長に就任。

オフィシャル HP <http://www.norikoogawa.com/>